# 実作に就て
## ――私の俳句態度

山口青邨

私の俳句態度はあらゆる機會に努力して作るといふことであった。机の上でも作る、庭に出て寫生もする、句會でも作る、吟行にも出かける、汽車の中でも作る、宿屋でも作る、つまり作品を得る爲めにはあらゆる機會を利用するといふことであった。

かういふやうに、作る機會や様式はいろいろでも、作る意欲は一つであった、よい作品を得ようとすることであった、このことは今も變らない。

或人達は句會を輕蔑し、車中の作を輕んじ、庭の寫生を嘲る、そして專ら机の上で、想を煉り、思想を盛り、苦心慘憺、深酷そのものの作品を以ってよしとする、然し私は、それももとより結構だとは思ふが、必しもそれが萬全だとは思はない。

それから俳句を作る時の條件に就てである、例へばほんたうに作り度くなって作る時と、あまり作り度くないのに作らなければならない場合などである。

後の場合は、あまり氣分がすぐれない時に句會に出た時とか、句會が明日に迫ってゐるので、今夜是非作らなければならないか、氣がすすまない、多忙であるとか、或は新聞雜誌に頼まれて、どうしても締切までに送らなければならないとかＩＩＩさういふ状態に於て無理に作るといふことであるが、このことは、良心的でないとか、よい作品を得られないとかいふ人がある。私もさうだと思ふ、實際氣がすすまない時にはよい考も浮ばないわけであるから、一應は私もこれには異議はない。然し、いやな時もそれを克服して、努力して作るといふことに、何か思ひがけない力が出て来るやうな氣もするのである。締切といふぎりぎりの土壇場で努力して作る、身を窮地に追ひこんで努力する、かういふところに何か神通力が生れるといふことはないか、又、かういふことになって止むを得ず作品か生まれるＩ－もしさうしなければ作品は生れなかったのだ。

－とにかく作品か出来るといふことは有難いことである。そして、それがそんなに悪い作品でもないなら、それこそほんたうに有難いことである。

よい心持で作り度くなって來るのを待ってゐたら、なかなか作品なんて生れて來ないかも知れない、またさういふ時、必ずしもよい作品が生れるとも限らない。

とにかく情熱を以って努力するといふところによい作品が生れるＩ私は自分の經驗からさう思ふやうになった。これは天才でない限り眞理ではないかと思ってゐる。

山口青邨著『俳句入門』より一部抜粋